

1860年代のドイツ労働運動と工場労働者（中）

小林, 栄三郎

<https://doi.org/10.15017/2331284>

出版情報 : 史淵. 80, pp.27-53, 1959-12-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

一八六〇年代のドイツ労働運動と工場労働者（中）

小林 栄三 郎

四

一八六〇年代のドイツにおける工場労働者のうち、労働運動にたいして最もはっきりした態度を見せたのは、ベルリンの機械工（Maschinenbauer）であつた。彼らの動きのもつ歴史的重要性については、この年代の労働運動と工場労働者との關係を概観したときに触れたが、われわれは機械を製造する労働者が何ゆゑにこのような態度をとつたか、機械工の全部が進歩党の支持者であつたか、またベルリン以外の地域の機械工はどうだつたか——こうした問題を考へてみなければらぬ。

まずベルリンの機械工について、その動向をかえりみよう。そのためには、一八六八年九月のベルリン労働者大会で少数派となつた彼らが退場させられたのち、シュヴァイツァーの指導のもとに會議を続行した多数派のなかにベルリンの代議員が二七名いたわけであるが、その代議員たちに代議権を委任した労働者の職種と人数を見ておくことが必要である。ベルンシュタインの「ベルリン労働運動史」（一九〇七年刊）によると、この多数派の代議員総数は二〇六名で、彼らは全国一一〇地区で一四二、〇〇〇名の労働者から選ばれたと称するが、そのうちベルリン地区の代議員二七名は五、四一二名の労働者から委任を受けたことになっている。

代議員名	委任者の職業	委任者数
アルント	靴工	一三三
アルムホルスト	"	一三三
シュローマン	"	一三三
アンデルゼン	大工	二〇〇
カペル	"	二〇〇
リッペ	"	二〇〇
リュプカート	"	二〇〇
シェーフアー	"	二〇〇
ツァップ	"	二〇〇
フェヒナー	パン工	五〇〇
ハンケ	"	五〇〇
ヒンスドルフ	"	五〇〇
メルケル	"	八〇〇
コールバウム	"	八〇〇
フィンドリング	彩色工 (Kolorist)	二二六
ヴルツェル	"	二二六
リーニツヒ	印刷工組合 (Märkischer Buchdruckerverband)	二四九
リューディツケ	仕立工組合 (Schneiderverein)	二四六
ミスマン	指物工	二〇〇
シュミッツ	"	二〇〇
ミュラー	製薬工	三〇〇
ペーター	製本工	一〇〇
ザイフリート	鞍工	一七五

シヨルツ
ダウト

建築工 (Baumhandwerker)

シュンク二世 (Schunk II)

"

バーネケ

"

この委任労働者数のうち、組織労働者数を示すものは極めて少数で、大部分は集会に参加して自分たちを代議員に選んだものの数を挙げたにすぎず、その人数のかぞえ方も自分たちに都合のよいようになつたであろうということは、ベルンシュタインの指摘するように、容易に想像しうるところである。^(註2)しかし、機械工を少数派として会議からしめ出した職種がいかなるものであつたかは、このベルンだけの表を見ても、およその想像がつく。ここに挙げられた数を一応そのまま認めると、パン工が一、六六五名で最も多く、大工の一、二〇〇名がそれに次ぎ、以下、製本工一、一〇〇名、指物工四〇〇名、靴工三九九名、葉巻工三〇〇名、鞍工一五〇名、仕立工組合六六名、彩色工五二名、印刷工組合四九名、建築工三一名という順序になる。しかし、この順序がそのままベルンにおけるラッサール派支持層の職種別の順序を意味するわけではなく、シュヴァイツァーたちのベルンにおける主な地盤は、大工、左官、葉巻工、靴工、印刷工などにあつたようである。^(註3)その点、上記のリストでは左官が入っていないことに気づく。ラッサールが組織した「全ドイツ労働者同盟」は本部をライプチヒにおいていたが、一八六八年九月十六日にライプチヒ警察はザクセン結社法にもとづいて同盟の解散を命じたので、シュヴァイツァーはザクセン以外の支部をも解散し、ベルン大会のち、新らしく「全ドイツ労働者同盟」を組織し、本部をベルリンに置くことにした。新規約は前よりもいっそう中央集権的につくられたが、機関紙「ゾツィアール・デモクラート」の十月十一日号に公表されたところによると、それは同盟を非合法と見なす口実を警察に与えないためだという。しかし、同盟は事実上ベルン警察の監督下におかれている実状なので、その点からシュヴ

アイツァーは反対派の攻撃を受けることになった。新同盟のベルリン支部は第一回の会合を十月十三日カフェー・フープリッヒで開き、靴工アルムボルストが委員長、金属工 (Metallarbeiter) エリンガーが会計、印刷工リーニッヒ、大工リユプカート、およびアウリーンの三名が監査となつてゐる。この会合で約五〇名が正式に同盟員となつたという。^(註5)ここで金属工エリンガーの名が出てゐるが、彼が工場労働者であつたか、小親方に雇われる賃労働者であつたかはわからない。

他方、ベルリンには労働者の教養を高めることを目的とする「ベルリン労働者協会」(Berliner Arbeiterverein)があつて、一八六八年九月ニュルンベルクにペーベルおよびリープクネヒトたちの主催で開かれた「ドイツ労働者協会第五回大会」には、このベルリン労働者協会も代表を送つてゐた。その大会では議員の多数がペーベルたちの提案した規約を承認したため、第一インスターに結びつくことになった。そこでベルリン労働者協会のなかで意見がわかれて、マックス・ヒルシュを先頭とする進歩党支持層とペーベルたちを支持する少数派とのあいだに激しい論争がおこり、三回にわたる代議員会のすえ、少数派は協会を脱退し、十月八日に「民主労働者協会」(Demokratischer Arbeiterverein) の結成準備委員会をつくり、「ニュルンベルク多数派」(Nürnberger Majorität) の立場に立ち、政治的にはペーベルたちのように「ドイツ人民党」(Deutsche Volkspartei) と提携することを宣言した。この協会は十月廿六日に正式に成立したが、そのさい植字工ミルケと機械工ケメラー (Maschinenbauer Kämmerer) とが議長に選ばれてゐる。^(註6)ここで機械工が議長の一人名となつてゐることは、ベルリン機械工の動向を考察しようとするわれわれにとつて、まことに興味ある出来事である。しかし、ケメラーがどの工場にはたらいてゐたか、彼のほかに機械工がどれくらいこの協会に参加したかは、わからない。いづれにしても、機械工のなかにアイゼナツハ派に賛成するものもいたことは、この事実から明らかである。一八六八年九月のベルリン労働者大会から排除された進歩党派の代議員たちは、すぐ会場をウニヴェルズムに移して労働者会議を開催したが、これはベルンシュタインによると「異常に多数の参会者」(ausserordentlich stark besucht)

をえた。その参会者の大部分は機械工であり、シュヴァイツァーの大会から排除されたのは機械工の代議員だったから、大会への反感はこの会議で非常にはげしいものとなった。進歩党の代議士フランツ・ドゥンカーが大喝采で議長に選ばれ、機械工の代議員にたいする大会の態度を非難する決議がほとんど満場一致で承認された。ベルンシュタインによると、いくたりかの社会主義者（カッセルのマン、バルメンのフリック、マクデブルクのブレーマー、ハンブルクのプラスト、ベルリンのペーター）も発言したが、このひとたちには短い時間しか発言が許されなかつたので、会議の空気を変えることはできなかつた。それにもかかわらずプラストは、巧みに選んだ歴史的比較によつて、非常に深い印象を聴衆に与えたので、会議は彼に許した発言時間を多数決で延長したほどであつた。けれどもマックス・ヒルシュの報告ののち、やがて開催さるべき会議の綱領が採択される。機械工の代表団は、他の職種の組合代表を加えてヒルシュの述べた精神に合致する規約をつくることを委任された。この会議は十月十一日、フランツ・ドゥンカーの司会のもとに、リンデン街のカフェ・エンゲルハルトで開かれ、客員としてシュルツェ・デリッチェおよびパリージウスが出席した。マックス・ヒルシュは自分のつくつた規約案を発表したが、これは本稿でさきに述べたように職種別の労働組合をつくつて、その下にまたそれぞれ地区組合を設けるといふ構想で、この案が採択される。（註七）

ここで機械工の代議員のなかに少数ながらも社会主義者がいたことは、注目し値しよう。とりわけベルリンの代議員のうちにもペーターのように堂々と社会主義を主張したものがあることは、さきに述べた「民主労働者協会」に議長を勤めた機械工ケメラーの存在とともに、きわめて興味ふかい。しかし、この場合にもペーターがベルリンのいかなる工場の労働者であるかがわからないのは遺憾である。ベルリン以外の地区から来た代議員で社会主義の立場を主張したものについても、その地区がわかるだけで、その他の事情は判明しない。そのうち、特に巧みな歴史的比較によつて非常な感銘を与え、発言時間の延長まで認められたというプラストはハンブルクから選ばれた代議員であつた。このことは、本稿でさき

に述べた一八六九年のハンブルクのラウエンシュタイン車輛工場のストと関連していろいろの想像をわれわれに許すけれども、彼についても詳しいことがわからないのは残念である。

一八六八年の末に、機関車製造工場として有名だったベルリンのボルジツヒ工場で、機械工と工場管理部とのあいだに紛争が起った。クラル (Krall) と、^二名^一の職長 (Obermeister) が或る労働者の横面をなぐった (onfeigen) ため、その同僚たちが大いに怒ったからである。新設のマックス・ヒルシュ系の「機械工ベルリン地区組会」が乗りだし、フランク・ドゥンカー、マックス・ヒルシュ、シュルツェ・デリツチュ、そのほか二人の労働者から成る代表団がこの職長の免職を経営者ボルジツヒに要求することになった。しかし、この代表団が正式にボルジツヒに面会して要求を突きつけるという運びには至らず、ボルジツヒとシュルツェ・デリツチュ個人とが何回も会談し、ボルジツヒが大晦日の晩に工場の大広間に労働者たちを集めた。彼は手みじかに、自分がクラルを叱責して免職すること、のちにクラルの改悛の情を認むれば再採用し得ることを報告した。ボルジツヒはさらに、自分と労働者たちとの一致協力をヒビが入らぬよう、労働者たちが怒りを水に流してくれることを願い、この席に出席してくれたことを感謝して、サッサと退場した。それからボルジツヒは、地区組会の委員長にあてて、「自分はもはや問題が片づいたと考えるので、代表団が自分を訪問する必要はないと思う」と書き送った。フォルクスツァイトゥング紙の記事によると、ボルジツヒが退場したのち、労働者の多数は彼の提案を承認することになったという。ベルンシュタインは、「このフォルクスツァイトゥング紙の記事にたいして反論は出なかつた」と書いているから、おそらくこれが真相に近いであろう。当時ラッサー派の機関紙「ゾツィアール・デモクラート」はこの結末について、「組合の完全な敗北だ」と酷評したが、それほどの完敗ではないとしても、これは「かなりダラシのない結末」(ein ziemlich lahmer Ausgang) だつた、とベルンシュタインは書いている。^(註^x)ただ、ここでフォルクスツァイトゥング紙の報ずるように、「労働者の多数」(die Mehrzahl der Arbeiter) がボルジツヒの提案を承

認したというのが事実であれば、それに反対論を唱えた少数派もあったと考えられよう。

一八六九年九月には、シュヴァイツァーのひきいる「全ドイツ労働者同盟」のベルリン部員は約五〇〇名に達し、機関紙「ゾツィアール・デモクラート」のベルリンだけの販売数は七六五に上昇したという。^(註9)その前年(一八六八年)四月にはベルリン大工組合(Berliner Zimmerverein)が労働時間の短縮と賃上げを要求して、ベルリンとしては未曾有の大規模なストをおこない、四週間の斗争のち使用者がわは要求をほとんど全面的に承認した。このときの大工職人のリーダーたるリュプカート(Lübker)、ミーツェル(Mietzel)、カペル(Kapell)はいずれもラッサール派の全ドイツ労働者同盟の熱心な活動家である。このスト終了前に全ドイツ労働者同盟のベルリン支部代表者としてテルケ(C. W. Tölcke)は民衆大会を開いたが、たいへんな盛況で聴衆は会場(Lokal Alcazar)に入りきれぬ有様だったという。ゾツィアール・デモクラート紙が会衆六、〇〇〇名と報じたのは、ベルンシュタインがいうように、いささか誇張であろうが、盛会であったことは確かだろう。大工に次いで左官も同じような要求を掲げてストをおこない、同じく四週間の斗争で勝利をおさめた。このときも集会がいくつも開かれて何干という会衆をあつめたといわれる。「全ドイツ左官同盟」(Der Allgemeine deutsche Maurerverein)のベルリンの代議員が報じているところでは、この左官同盟の加盟員は四、五〇〇名であるという。こうした背景と、さらに同年九月のベルリン労働者大会の成功とがあったのでラッサール派としては、「全ドイツ労働者同盟」の正式のメンバーはベルリンで一八六九年九月にわずか五〇〇名前後だったにしても、イザというときには多数の労働者を動員できる自信がいたのであろう。これまではラッサール派もヒルシュ派も、互いに集會権を尊重し合つて妨害を差控えていたが、この一八六九年秋から、ラッサール派はヒルシュ派の集會を妨害し粉砕する方針をとり、それを実行した。^(註10)

そこで、たまりかねた進歩党はベルリンの地盤を確保するため同年十一月に労働者大会を企画した。機械工を支持層と

してもつている関係からベルリン市の北部でならばラッサール派に對抗できると考えたのである。すなわち同月廿八日(日曜)ユニヴェルズムを会場としてこれを開催することにしたが、ほんとうのネライは最近の自派の集会にたいするラッサール派の妨害問題を取りあげて対抗策を講ずることにあつたらしい。その準備委員会に召集されたのは、機械工としてはアンドレーアック(Andreak)、フェッターライン、キッツマン、ハイム、クノプケ、デーネル、ホッペ、ミュラーの八名であり、そのほかにブリキ工オッテ、指物工エーヴァルドル、技師(Ingenieur)ブルーム、「ベルリン労働者協会」の会長クレープス、同協会のメンバーたるユーリウス・マイヤー、「工場労働者地区組会」(Ortsverein der Fabrik- und Handarbeiter)のラントグラーフなどであつた。こうしてベルリンの機械製造諸工場につきのようなプラカードが掲出された。「友であり、同じ労働者仲間である諸君。諸君が明日の「ユニヴェルズム」における集会に、ぜひとも多数出席されることをお願いする。なぜなら、ベルリンの労働者たちが「知性ある労働者」(intelligente Arbeiter)という名を与えられるかどうかは、主として明日の集会の成功いかんにかかっているからだ。シュヴァイツァー博士の党のリーダーたちは、機械製造諸工場が「愚鈍の育成場」(Brutstätte der Dummheit)であるとしているが、事實はそうでなく、一八四八年のときと同じ精神が機械工のなかにまだ生きていることを彼らに見せてやらねばならぬ。われわれは今日まであまりにも久しく一つの政党——たしかに小さくはあるが、よく組織された政党——から後見されてきた。この弊害を明日は矯正しなければならぬ。だから、いやしくも正しく考える労働者なら、若干の予備討議に参加するために、十一時でなく九時に「ユニヴェルズム」にやって来るだろう。あらゆる不一致を予防するために、ボルジツヒのアンドレーアックをわれわれの合言葉にしよう。「ベルンシュタインは、このプラカードが或る程度の巧妙さで、当時まだ機械工のあいだに生きていた伝統(Traditionen)と結びつけられている、と評している。一八四八年の精神をもち出したところは、そう評し得るかもしれない。それにしても資本主義的経営とたたかうためではなく、ラッサール派とたた

かうために四八年の精神をかつぎ出さねばならないというのは、苦しいところだ。ベルンシュタインによると、——機械工の組会はとにかく或る程度の強さをもっていたから、集会の主催者たちは、今度こそラッサール派の奇襲を受けることはあるまい、機械工たちは正確に午前九時に会場に来てくれるだろう、と思った。だが、慎重を期して、まず頼りになる労働者たちが九時から背後の入口を通つて先に広間に入り、しかるのち正面の入口の扉を開く手筈にした。だが、今度も先に集つてきたのはシュヴァイツァー派の労働者だった。朝の八時には何千人という労働者がウニヴェルズムをとり囲んでしまった。そして背後の入口から約九〇人が広間に入ったのち、その背後の入口を釘づけにしたので、進歩党系の労働者は一人も広間に入れない。外には、いよいよ数を増す大衆がひしめいた。あとから来た進歩党系の機械工は、ラッサール派が固めている人間の壁のために会場に近づけない。とうとう十時半になつて庭園の扉が開かれ、広間にナダレ込んだが、辛うじて三分の一が進歩党系と中立、残り三分の二はラッサール派によつて占められた。ボルジツヒ工場の進歩党系の機械工で、機械工組合長でもあるアンドレーアックが午前十一時になつてようやく会議の召集者として開会の辞を述べたが、彼は労働者が互いに肉を切り裂きあつてはならないと巧妙に説いた。「われわれはお互いに対立したりしないで、並び進んでゆけるような道、以前あなた方（ラッサール派）の苦しかつた時代に私たちがとつたような道を見つけてゆかねばならない。労働者のもつ唯一の権利である集会権を空しいものとしたくはない」というのである。議長選挙になると、ラッサール派のテルケが圧倒的多数で当選し、アンドレーアックは惨敗した。副議長選挙には、あらためてアンドレーアックが推薦されたけれども議長テルケは、アンドレーアックを後まわしにして、ラッサール派から推薦されたリュブカートの方を先に表決にかけたので、たいへんな騒ぎになった。機械工のあいだでは、開会に先だつて妥協が成立して両派から一名ずつの議長が出ることになつていふ噂がひろまつていたからだ。そこでテルケもやむをえず、まずアンドレーアックについて、それからリュブカートについて表決に問うた。リュブカートが当選したが、彼は受諾しない。しか

し何回やつてもリユプカートが圧倒的多数なので、ついに受諾した。筆者もラッサール派のハーセルマンが選ばれた。このときもヒルシュ派はアンドレーアックを推薦したが、アンドレーアック自身が絶対に受諾の意志のないことを宣言したので、けつきよく役職は三つともラッサール派に独占されたわけである。(註11)

ボルジツヒ工場は一八五四年七月六日に創立者ヨーハン・カール・フリードリッヒ・アウグスト・ボルジツヒ (Johann-Karl-Friedrich-August Borsig, 1804—1854) が死んで、息子のアウグスト・ユーリウス・アルバート・ボルジツヒ (August-Julius-Albert Borsig, 1829—1878) が継承していた。父のボルジツヒは大工の子としてプレスラウに生れ、ベルリン工業学校を一八二五年に出て、ベルリンのエーゲルス (J.-A. Egells) 製鉄・造機工場に一八三六年まで勤めたのち、一八三七年に同じくベルリンにボルジツヒ機械製造工場を創立した。当初は労働者数もせいぜい五〇人くらいであつたらしいが、しだいに増加して一八四七年には、一、二〇〇人に達した。彼が死んだ一八五四年までに、すでに機関車五〇〇台を生産したという。しかし、イギリスから鉄を買っていたので製鉄をおこなう必要を感じ、一八四七年にベルリンに近いモアビート (Moabit) に溶鉱炉を建設し、工場を増設している。このモアビートには、プロイセン国営の「海外商事」 (Die Seehandlung) が造機工場 (労働者二八四名) をもっていたが、ボルジツヒはこれを一八五〇年十一月、一四万ターラーで購入し、やがてそれを拡大して、ここだけでも約六〇〇名を雇用したといわれる。父ボルジツヒが死んだとき、息子のボルジツヒは二五才だったが、すでにドイツのみならず諸国の大工場を訪れて見聞をひろめていて、父の遺業をつぎ、さらにこれを発展させた。ベルリンの本工場およびモアビートの分工場はいずれも拡張されたので、従業員も増加したと思われるが、一八六〇年代の労働者数はわからない。一八七五年には従業員数は三、〇〇〇名をこえている。一八五〇年にすでに一、八〇〇名であったことから推定して、一八六〇年代には二、〇〇〇名以上であったと考えられる。(註12)

一八六〇年代のベルリンには、ボルジツヒのほかにも機械をつくる工場があつたが、その労働者数など詳しい事情はわからない。ベルリンで最も古い機械製造工場はフロイント (G. C. Freund) の工場だといわれる^(註13)。一八六二年マクデブルクに農業用自動車製造を主とする工場をつくつたヴォルフ (R. Wolf) が、まだ二十才であつた一八五一年、機械の製造技術を学ぼうとして入社したのは、ベルリンのヴェーラート (Wöhler) 工場だつた。このころすでにベルリンは、機械の製造にかけてはドイツの中心地として有名だつた。ヴェーラート工場はヴォルフが入社する前から機関車の製造をはじめていたので、ボルジツヒは競争のため機関車の値段をできるだけ下げたといふ。ヴェーラート工場には、のちに独立してマクデブルクにグルーゾン工場をつくるヘルマン・グルーゾン (Hermann Gruson) が技師長として活躍していたので、ヴォルフはこの工場を選んだといわれる。工場主ヴェーラートは、ボルジツヒなどとともにドイツ第一級の工業家として聞えていた^(註14)。以上のフロイント、エーゲルス、ヴェーラート、ボルジツヒなどから遅れて、ベルリンの造機工業界に進出してきていたのが、ホッペ (Hoppe) とシュヴァルツコプフ (Schwarzkopf) である^(註15)。またヴォルフが一八六二年に自分の工場の建設にとりかかつたとき、工場に設置する機械については発注先をずいぶん吟味しているが、縦二五フィートの台に一〇インチの高さの切削尖端をもつ旋盤を注文したのは、ベルリンのヴェディング (W. Wedding) 工場だつた^(註16)。これらの工場はどれも一八六〇年代に相当大きな規模のものであり、労働者数も多かつたと思われる。さればこそベルリンの機械工は、ラッサール派に対抗する一大勢力となりえたのであらう。

五

ベルリンの機械工については前項に述べたが、何ゆえに彼らがこのような態度をとつたかという問題は、ベルリン以外の地域の機械工の動きと比較して考えねばならぬ。この問題は、さらに機械の製造以外の部門の工場労働者の動きとも関

連して解明されるべきであろう。しかし本稿のはじめにも断っておいたように、一八六〇年代のドイツの史的研究は、こうした観点からすると極めて未開拓であり、工場の統計資料なども一八四〇年代、五〇年代および七〇年代については比較的によく存在しているのに、六〇年代は驚くほどすくないようである。そうした歎きは、もちろん筆者の浅学と調査不十分によるところが多々であろう。(Hamerow, Theodore S. *Restoration, Revolution, Reaction. Economics and Politics in Germany 1815—1871*. Princeton 1958. の記述そのものは本稿にほとんど役立たないが、末尾の文献表、とくに二八二ページにあげているものには、筆者の参照しえなかつたものが多い。) 東ドイツおよび西ドイツの学界でも新史料を出してくれるだろう。本稿では、これまで筆者が参照できた乏しい材料でやってゆくほかはない。そうなる、まずベルリン以外の地区で工場の状態が比較的に詳しくわかるのは、バーデンとアウクスブルク地区とである。

本稿のはじめに触れたフランツ・キストラーの「一八四九—七〇年のバーデンにおける経済的および社会的事情」(一九五四年刊)によると、機械の製造そのほか鉄加工工場の一八六〇年代における労働者数はつぎのようになっていく。キストラーが創立年あるいは年代をあげているものは、工場名の下にカッコで付記する。労働者数の多いものから順次にならべてみた。(労働者数の下のカッコ内の年数は調査年あるいは年代を示す)

工場名	主要製品	所在地	労働者数
カールスルーエ(一八四〇年代)	機関車、客・貨車輛	カールスルーエ	七〇〇(一八六一年)
ペンキザー兄弟	(鉄鋼加工)	ブフォルトツハイム	七三二(一八六六年)
シュミード・ウント・マイヤー	鉄道の客・貨車輛	ブレーツィンゲン	七三三(一八六六年)
フェルストリツヒ・フェルステンベルク(諸機械)		カールスルーエ	六〇〇(一八六〇年代末)
		インメンディングン	三四〇(一八六九年)
			一五〇(一八六五年ごろ)
			九二(一八六九年)

フアルカウ	針金、ネジ	カールスルーエ(?)	九一(一八六九年ごろ)
H・フックス	鉄道の車輛	ハイデルベルク	八六(一八六九年)
パッサーマン・ウント・モント(一八六五年)	ミシン	マンハイム	六九(一八六九年)
ハイト・ウント・ノイ(一八六〇年)	ミシン	カールスルーエ	六二(一八六〇年代末)
ハインリッヒ・ランツ(一八六七年)	マグサ切断機・打穀機	マンハイム	五八(一八六九年)

そのほかに造機および鉄加工の工場で二〇名以上を使用するものが二〇あつて、その労働者数は合計六〇三名(一八六九年)になるという。^(註17)

キストラーが一八六〇年代について述べているところによると——バーデンの諸工場の労働者は、時として困難な生活状態におちいつたにもかかわらず、一八六八年までは、どこにも労使のあいだに比較的重大な緊張関係が生じなかつた。賃労働者の唯一の団結であつた労働者教養協会は、ほとんどもつぱら「教養」を高めることだけに専念したので、それだけにまた、労働者のなかの最も生活困難な層には、ほとんど魅力を發揮しえなかつた。そのうえバーデン産業の地域的分散、また産業労働者と農業との依然として密接な結合、こういった事情のためにこの国では、賃労働者の状態の改善を要求するための団結が賃労働者そのもののなかから発生するのを妨げられていたのである。一八六三年ラッサールが全ドイツ労働者同盟を結成したのちも、バーデンの労働者教養協会はそれと結びつかなかつた。一八六五年にマンハイムの葉巻工は「全ドイツ葉巻工同盟」に加盟したが、バーデン全体としてはそれも大きな影響をおよぼしえなかつた。しかし、一八六八年になると、情勢が變つてくる。この年、ハンブルクにおける全ドイツ労働者同盟の総会でシュヴァイツァーは労働者設立の方針を貫徹し、余勢をかつて同年十二月バーデンに乗りこみ、まずハイデルベルク市での集会に彼の諸原理を宣明した。この集会は、同市の仕立工組合(Schneiderverein)によつて準備されたが、シュヴァイツァーの演説、およびマンハイム、マインツ、オッフエンバッハからやつて来た全ドイツ労働者同盟の活動家の呼びかけは、バーデンのな

かにも新たな支持者をつくり出すことになった。これらの支持者は、十二月廿二日マンハイムで工場条件をとりあげ、それが災害保障措置などを含むかぎりでは承認できるが、使用者だけに権利を認めて労働者には義務だけを押しつける契約条件を含む点についてこれを非難する決議をおこなっている。さらに同じ十二月に、バーデンに隣接するスイス領バーゼル¹の例にならって第一インターの支部がバーデン国内のレラッハ(Lörrach)に設立されると、バーデン当局は大いに警戒の目を光らせる。レラッハ支部の規約では公益的目的だけを掲げているが、その規約によるとバーゼル支部につながっており、バーゼル支部は明らかに「公共の安寧をおびやかす諸目的」を追求しているから、というのである。だからバーゼルに不穩の動きがあると、要慎のため当局は二週間もレラッハ支部を閉鎖させ、さらに掛官をレラッハに送っている。年が明けて一八六九年に入ると、全ドイツ労働者同盟のバーデンにおける活動は一段と強化される。こうなると、バーデンの労働者教養協会は統一的態度をうち出すことができず、ラッサール派の活動に對抗して労働者の広汎な層のなかに十分の支援を見いだし得ない。同年二月、全ドイツ労働者同盟の活動家、H・フォン・ボルスト、ケルシュ、ハウシユタインの三名がバーデンの諸都市をまわって集会を開いた。その集会は成功したところもあり、そうでないところもあったが、そのさい彼らは、レラッハやマンハイムから来たバーデン土着の運動員、および「カールスルーエ機械製造工場」から来た活動家によって支援された——とキストラーは述べている。彼がバーデンにおける労働運動の低調だった理由を、バーデン産業の地域的分散、および産業労働者と農業との結合に求めているのは興味ふかいが、これについては本稿でのちに検討する。

ここで「カールスルーエ機械製造工場」(Maschinenfabrik Karlsruhe)の名が出てくることは、われわれにとって注目に値しよう。機械工のなかにラッサール派の活動家が生れているからである。この工場は上記のリストの第一位に出ているが、ワークホイゼル(Waghäusel)製糖工場(本工場だけで一八六九年の労働者六〇一名、ほかに分工場が三つ

あつて、その労働者二二八名)およびエットリンゲン(Ettringen)紡績織布工場(一八六〇年労働者一、八〇〇名)とともにバーデンの三大工場といわれた。一八四七年にはワークホイゼルおよびエットリンゲンと同じくカールスルーエ機械製造工場も経営不振におちいつたが、政府が株の十分の一をもち、さらにケルンおよびフランクフルト・アム・マインの銀行家が援助したので立ちなおり、一八五六年には労働者一、二〇〇名となつて、ひとつの全盛期に達した。一八六〇年代には造機工場がバーデン国内にいくつも新設され、従来の諸工場も発展したが、造機部門ではこの工場がやはり最大だった。一八六〇年代の初めには不況に見舞われたが、それも克服して一八六二—六三年の経営年度には四パーセント、つぎの六三—六四経営年度には七・五パーセントの配当をしている。六五年から六六年にかけては戦争気がまえて大砲の受注高がふえているが、しかし全体としては、やはり鉄道の車輛、タービン、回転台そのほかの工場施設が主たる製品であつた。労働者数は上記のリストでわかるように、一八六六年には九三二名だったが、翌年には七七三名となり、さらに六〇年代の末(はつきりした年数をキストラーは記していない)には六〇〇名に減少している。^(註19)こうした人員減少すなわちクビ切りが、さきに見たようなラッサール派の活動家の発生と関係があるかもしれない。クビ切りこそ、労働者の自覚を高め、資本主義の欠陥を最も明確な形で労働者たちに見せつけるものだからである。しかし、この減員はクビ切りによるものでなく、労働者の移動のはげしい当時のこととて、減つた労働者の補充をしないことによつておこつたかもしれない。当時の労働者の移動状況については、本稿でも後述する。いずれにせよ、詳しい史料がないので、カールスルーエ工場の人員減と労働者意識とのつながりは、どちらとも断定できない。

つぎにアウクスブルクについては、ヨーゼフ・グラスマンの「十九世紀アウクスグルク産業の発展」(一八九四年刊)が、一八六〇年代の工場について、かなり詳しく記述している。それによつて主な造機工場をあげると、つぎのようになる。創立年のわかるものは工場名の下のカッコ内に付記した。労働者数の下のカッコ内の年数は調査の年を示す。所在地

はいずれもアウクスブルク市。

工場名

労働者数

アウクスブルク (Maschinenfabrik Augsburg) (一八四四年)

(四三〇—一八六五年)
(五四〇—一八六九年)

L・A・リーディングー (Firma L. A. Riedinger, Maschinen- und Broncewarenfabrik) (一八五七)

(三五〇—一八六五年)
(三九〇—一八六九年)

ヨハネス・ハーク (Maschinen- und Röhrenfabrik von Johannes Haag) (一八四三年)

一八二—一八六九年)
五〇—一八六五年)

ヌスバウマー兄弟 (Firma Gebr. Nussbaumer)

右のうち、リーディングーは機械のほかに青銅品をも製造し、ヨハネス・ハークは、機械とともに導管もつくっている。以上のほかに、真鍮加工をする工場として、

ヨーゼフ・アントン・ベック (Josef Anton Beck & Cie.)

(二〇〇—一八六五年)
(二六〇—一八六九年)

がある^(註20)

グラスマンによると、アウクスブルクの労働者のあいだにも、一八六九年に社会主義運動が入ってくる。労働者の不満がかきたてられ、賃上げ、労働時間短縮、悪質雇主排斥などを目ざして、いくつかの工場にストがおこり、その一部は成功している。「アウクスブルク機械製造工場」は一八六九年八月にこれまでの十二時間労働を十一時間に短縮して時短のトップを切り、他の造機工場もすぐそれにならった。この地区の繊維工場もすべて一八六九年十一月一日から労働時間を十二時間に短縮した。(繊維工場で十一時間労働になるのは、よくやく一八八九年のことである。)この時短闘争のために賃下げにならぬよう^(註21)、出来高払いの賃金率が引上げられたという。グラスマンは労働運動の内容や経過や活動家などの詳しいことには立入っていないので、ラッサール派が造機工場のなかにどれほど食いこんだかは不明である。しかし、こ

ここではベルリンのように機械工の大部分が団結してラッサール派に対抗するというような状況は、生れていないらしい。もしそうした状況が存在していたら、基本的に経営者の立場に立つグラスマンは必ずそれに言及したであろうと思われるからである。

六

一八六〇年代のドイツ労働運動に紡績および織布工場の労働者の名がほとんど出てこないことは、われわれに奇異の感をいだかせる。問屋制家内工業でひどい収奪を受けているザクセンの手織労働者がアイゼナツハ派の主たる基盤をなしたことは周知の事実であるが、織維工場の労働者はこの時期にどうしたのであろうか。この謎を解くためには、当時の紡績・織布工場の状態を明らかにしなければならぬ。しかし、ここでもわれわれは史料不足に当面する。

ハンス・ハウスヘルの「近世経済史」(一九五五年刊)は一八七〇年ごろまでを対象としているが、十九世紀のドイツ織維工業について、つぎのように要約している。——ドイツの織維工業として以前に最も栄えたのはリネン(亜麻)工業だったが、これは紡績・織布の両工程とも全く家内工業としておこなわれてきたので、機械化が困難だった。ポーランドやロシアのような重要販路が閉ざされ、アイルランドやポヘミアでは一段と安い価格で生産されるようになると、ドイツの亜麻工業は苦境に立つ。機械をつかう紡績工場が設立されたけれども、その生産は国内需要をまかなうに足りない。一八六四年になっても、ドイツ関税同盟内のスピンドル数はわずかに二一八、五〇〇で、フランスの六〇万、イギリスの一七五万とはケタがちがう。手織としてのリネン織布業は、それが副業としておこなわれていた地方では機械化の進展につれて消滅するが、専業としておこなわれていた地方では、織工が飢餓賃金ではたらくので遅くまで生きのこった。古くからリネン工業の中心地であったシュレージエン、ラウジッツ、ウェストファーレン、およびボーデン湖以北の諸地域がそ

うである。だが、リネン糸は輸入せねばならなかった。総じてリネン織布工業は収縮してゆき、その収縮の苦しみは、家内工業としてそれに従事する貧しい織工たちによつて負担された。リネン工業の減退と対照的に、上昇拡大してくるのが綿工業だ。こちらは、すくなくとも紡糸工程では初めから機械をつかう工業として台頭したので、リネンのばあいのような摩擦をおこさずにすんだ。綿工業はドイツでも十八世紀からあつたが、とりわけ大陸封鎖時代には、グラートバッハからエルバーフェルトにいたるライン地方と、「ドイツのマンチェスター」とも呼ばれたヘムニッツ周辺地区とが非常に繁栄した。しかし、そのちイギリスの競争にさらされて停滞する。関税同盟ができてドイツ綿工業もやっと独立できるようになつてゆくが、まだ長いあいだ綿糸を輸入する。スピンドル数の変化は、このちの変化を物語つてゐる。関税同盟の加盟諸邦だけでスピンドル数は一八三六年に六二六、〇〇〇、一八四九年には九〇万、そのち急速に上昇して一八六一年には二三〇万を越える。これに対応して綿糸の輸入量は減少し、この期間に全消費量の四分の三だったが四分の一となり、それに反して原綿の輸入量は一八三六年から六一年までのあいだに十倍になつてゐる。しかし、織布の機械化は紡糸工程のばあいよりもはるかに時間がかつた。一八六一年に九四〇工場で動力織機二三、五〇〇台にたいして、高級品用として手織機が一三、〇〇〇台もあり、小企業では一五万台以上もの手織機が残つてゐる。しかし、このち年々、手織機はすくなくなり、一八七五年ごろにはほとんど消えうせる。このように手織機は遅くまで残るが、手織の織匠は早くから独立性を失つており、綿糸は問屋や工場主から渡されるものを使い、染色工程は大企業に依存した。こうした綿工業での手織工の没落過程は、シュレージエンのリネン手織工のばあいほど世人の注目をあつめなかつたが、こでもひどい低賃金と極めて劣悪な生活条件とにたえしのびながら、押しよせる機械化の波とたたかい、ついに屈伏してゆく悲惨な姿があつた。いずれにせよドイツ綿工業がイギリスと競争できる力をかちえてゆくのは、一八六〇年らしいことである——とハウスヘルはいう。^(註23)このハウスヘルの要約には検討の余地があろうけれども、本稿では立入らない。ただ、ここに

ハウスヘルが指摘している綿工業の手織工が一八六〇年代の労働運動に演じた役割については、従来の研究が比較的に等閑視しているように思われるので、今後なお十分に考察する必要がある。

キストラーによつてバーデンで二〇〇名以上の労働者を使用する綿紡績・織布工場だけをあげると、つぎのようになる。創立年のわかるものは、工場名の下のカッコ内に示した。労働者数の下のカッコ内には調査の年または年代を記す。(註24)

工場名

労働者数

エットリンゲン (Ettingen) (一八三六年)

一、八〇〇(一八六〇年)

ケヒリング (Koeching) (一八一七年)

{三七〇(一八六一年)
一、〇〇〇(一八六〇年代末)

ガイギ (Geigy) (一八三五年)

{七一八〇〇(一八六一年)
四八〇〇(一八六〇年代末)

サラジーン・ウント・ホイヌラー (Sarasin und Heusler)

{(ハーゲン、レットテルン両工場合計) 七〇〇(一八六〇年)
(ハーゲン工場のみ) 五九七(一八六〇年代末)

フォルカーツハウゼン (Volkertshausen)

五一一(一八六〇年代末)

アルレン (Arten)

四六四(一八六〇年代末)

グロスマン (Grossmann)

{(フロムバッハ工場一八三〇年、レラッハ工場一八五〇年) (両工場合計) 四五〇(一八六一年)
工場のみ

グレーター (Grether) (一八四九年)

{(アッツェンバッハ工場) 四五〇(一八六一年)
(ザンクト・ブラーシエン工場) 三〇〇(一八六一年)

イゼリーン (Iselin)

五〇〇(一八六一年)

ラウフェンミューレ (Laufemühle)

四四一(一八六〇年代末)

アッツェンバッハ (Atzenbach)

四〇七(一八六〇年代末)

オフフェンブルク (Offenburg)

三五八(一八六〇年代末)

ザンクト・ブラーシエン (St. Blasien)

三三二(一八六〇年代末)

一八六〇年代のドイツ労働運動と工場労働者(中)

一八六〇年代のドイツ労働運動と工場労働者(中)

四六

(スイス系会社経営工場、所在地シルタツハ Schritlach)

プフリューガー (Pflüger)

一五〇(一八六一年)
二二二(一八六〇年代末)

ホイスラー (Husler)

二〇四(一八六〇年代末)

なお、このほかにバーデンには絹糸および絹織物の製造工場として当時ドイツ最大のものとされたメッツ (Mez) 兄弟の工場がある。そのフライブルク工場は一八三四年の設立だが、婦人労働者を使う関係で、あちこちに工場を建てたという。ニーデレシヤツハ工場は一八三八年、ウムキルヒ工場は一八四五年、エンディングン工場は一八五八年に建設されている。その婦人労働者は一八六一年に合計七〇〇名にのぼった。^(註26)バーデンにおける絹織物の捺染工場として有名なのは、レラツハ市の「ケヒリーン、バウムガルトナー会社」(Firma Koechlin, Baumgartner & Co.) のもので、その労働者数は一八六二年に五二〇名だったという。^(註26)

バーデンの繊維工場は以上のように大きな発展をとげていたが、ドイツにおける繊維工業の中心地の一つとして有名なアウクスブルク市ではどうであったか。一八六〇年代における労働者数のわかる主要な綿紡績・織布工場だけをあげよう。創立年のわかるものは工場名の下のカッコ内に記す。

工場名	労働者数
リーディングアー (Baumwoll-Weberei L. A. Riedinger) (一八六五年)	五七八(一八六九年)
クラウス (Baumwoll-Spinnerei und Weberei J. G. Krauss & Sohn) (一八六六年)	一〇〇(一八六六年)
ゼンケルバッハ (Baumwoll-Spinnerei Senkelbach) (一八六二年)	五〇〇(一八六七年)
ハウンシユテット (Haunstetter Weberei)	一八〇(一八六二年)
	三八〇(一八六九年)
	二六四(一八六四年)
	三二〇(一八六八年)
このほかに綿紡績・織布工場として「シユタットバッツ」(Spinnerei am Stadtbach)、「タール」(Spinnerei J.	

F. Chur & Söhne) '機械化綿紡』(Mechanische Baumwoll-Spinnerei und Weberei) '綿精紡』(Baumwoll-Fein-Spinnerei) などがあるが、六〇年代の労働者数はわからない。右のうち、シュタットバッハは資本金九〇万フロリーンの株式会社として一八五一年に創立され、はじめスピンドル数二五、〇〇〇だったが、やがて三万にふやし、さらに工場を増設してスピンドル五六、〇〇〇を新たに置き、一八六〇年代のはじめにスピンドル五六、三六四(うち自動スピンドル五一、〇四〇、トロツセル・スピンドル五、三二四)をもつ建物を増設した。一八六八年のスピンドル総数九六、〇〇〇。タービン六で、五五〇馬力。蒸気機関九で千馬力。グラスマンによると、一八九〇年代に入つて「ライプツヒ紡績」ができてから第二位となったが、それまではドイツ最大の紡績工場だったという。「クール」は一八六〇年代のスピンドル数二四、〇〇〇。「機械化綿紡」はその規模がつきに述べる「綿精紡」とおよそ似かよつたものであつたと思われる。「綿精紡」は一八六〇年のスピンドル数四五、〇三六だったが、一八六七年にはさらにスピンドル七、九五六を増設している。リストに挙げた「リーディングガー」はじめ織機二〇〇台、のち四三〇台を増設して労働者五七八名を使っている。また「ゼンケルバッハ」は一八六二年に創立された新鋭工場であるから、簡単に比較・類推することはできないが、新鋭であるほどスピンドル数に比べて労働者数はすくないであろう。その「ゼンケルバッハ」ですら、スピンドル三一、三二八で一八六二年に二八〇名の労働者を雇用している。これから推せば、労働者数のわからない上記の諸工場についても、およその想像はつく。

アウクスブルクには当時ドイツ関税同盟内で第一といわれたウーステッド(梳毛糸)の紡績工場(Kammgarn-Spin-Herei)もあつた。その株式資本は一八六三年一八〇万マルク、一八六七年二四〇万マルクで、労働者数は

一八六二年	六〇〇	一八六八年	七九〇
一八六四年	八〇三	一八六九年	一、〇六八
一八六五年	一、〇〇〇		

一八六〇年代のドイツ労働運動と工場労働者(中)

となつてゐる。さらに「シェプラー・ウント・ハルトマン」及び「捺染工場」(Kattundruckerei Schöppler & Hartmann)の労働者は、一八六二年六〇〇名、一八六五年四五〇名、一八六九年五〇〇名である。^(註28)

以上、バーデンおよびアウクスブルクの造機・金属加工の工場と繊維工場とのうち、規模の大きいものだけを挙げたわけであるが、ベヒテルの「十九世紀および二十世紀ドイツ経済史」(一九五六年刊)によると、一八六一年のザクセン工場法では、二〇名以上の労働者を使用する営業所(Betrieb)がこの法の適用を受ける。この時代の統計などで「工場」の概念規定があいまいであることは、本稿のはじめにも触れておいた。邦語の「工場」に相当するドイツ語は通常「ファブリーク」(Fabrik)だけれども、そのほかに「ヴェルク」(Werk)や「ロツェッテ」(Hütte)も使われる。ベヒテルは上記の著書で、Werkとさう言葉(HüttenwerkやElekttrizitätswerkなど)は、たゞさうの場合、動力素材や原料(Kraft-und Grundstoff)を獲得するときに使われ、Fabrik und Anstaltとさう言葉は機械(Maschine)や装置(Apparat)をつくるとき、すなわち、いわゆる生産財産において用いられ、ただ「ファブリーク」とだけというのは、動力機械や作業機械を使つておこなう財生産、いわゆる消費財産業の場合である、と述べている。^(註29)しかし機械を製造するときにも「ファブリーク」とだけ云つて、「ファブリーク・ウント・アンシュタルト」とは云わないことは、造機工場のとほに見たとおりである。本稿では、そうした用語の検討は当面の課題でないので、これ以上立入らない。われわれは一八六〇年代の「工場労働者」と労働運動との関係を問題としてゐるので、ひとり造機工場や繊維工場のみならず、他の部門の工場についてもこの年代にどれくらい大きな規模のものが発展してゐたかを知りたい。しかし、例によつて史料の不足に悩まされる。

一八六〇年代のバーデンには、砂糖工場として「ヴァークホイゼル」(Nuckerrfabrik Waghäusel)があり、その労働者数はヴァークホイゼルの本工場だけで一八六九年に六〇一名であり、モスバッハ、グレッツィンゲン、エッピンゲ

の三つの分工場に合計二二八名がはたらいていた。製紙工場では一八六九年の調査によると、

工場名	所在地	労働者数
ブール (Buhl)	エツトリンゲン	一九八
ボーンベルガー (Bohnenberger)	プフォルツハイム	一二七
フリンシヒ (Flinsch)	フライブルク	八二

となつてゐる。壁紙(Tapete)工場では同じく一八六九年の調査で

工場名	所在地	労働者数
エンゲルハルト (Engelhardt)	マンハイム	二〇八
シェラー (Scherer)	ハイデルベルク	九二
シェラー・ウント・ハーバーレ (Scherer & Haberle)	コンスタンツ	九〇
エーリスマン (Erisman)	ブライザッハ	五三

などがある。^(註31) ガラスの生産および加工はおおむね小規模で、六つのガラス工場 (Glashütte) の労働者数の合計が一八六〇年代の末で二五〇名しかない。ただ「マンハイム鏡工場」(Mannheimer Spiegelmanufaktur) だけは技術的に近代化し、厚生設備も当時としては優れていた、とキストラーはいう。労働者数は一八六四年に六〇〇名だったが、一八六九年には四六四名に減少している。キストラーはこの減少が、蒸気機関を九台にふやして合計三〇五馬力とするなどの機械設備の改善によるものであろうと推定している。フライブルクで磁器製ボタンをつくる「リスラー会社」(Ristler & Co.) の工場は、近東にも販路を開拓して繁栄し、一八六〇年代の末に労働者四〇〇名以上を使い、ノイエルスハウゼンの分工場にも九一名がはたらき、さらにフライブルク市周辺に家内労働として一、二〇〇家族に仕事をさせていたという。^(註32) チコリーという植物の根からつくるコーヒー代用品 (Cichorienkaffee) の工場 (フェルカー社 Firma Völker) はラー

市にあって、一八六〇年代の末に約一〇〇名の労働者を使っていたし、同じくチコリー製造工場でフライブルク市にあるもの(キュンツァー社(Firma Künzer & Co.))は、ドイツ国内のみならずフランス、スイス、イタリア、アメリカにも輸出する盛況であったが、その労働者数は一〇〇名から二五〇名のあいだを上下した。この労働者数の増減は十月の収穫後にこの工業のシーズンがくるので、そのときは多くなり、シーズンが過ぎると減少するわけである。ゴム製品の工場として大規模なのは、一八五〇年にマンハイムに設立されたもので、これはアメリカの「ハッチンソン社」(Firma Hutchinson)のパーリー工場の分工場だが、「ポワネル社」(Poissnel & Co.)と称し、主にゴム靴をつくった。一八六九年に一三九名の労働者を使っていたが、一八六四年に同じくマンハイムに新設されたアメリカ資本のゴム製品工場はそれよりもはるかに大規模で、一八六七年にすでに六〇〇名を雇用し、ゴムで櫛、ペン軸、手箱、装飾品などをつくっている。化学工業もこの年代には盛んになってきていて、ヴォールゲレーゲンにある「化学工業社」(Verein chemischer Fabriken)は、六〇年代に製品への需要が増して、当時のバーデンのいかなる株式会社も果さなかつた二五パーセントの配当をおこなっている。原料は硫黄をシシリーから、黄鉄鉱をフランスとドイツから、塩はヴェルテンベルクとバーデンのネッカー塩坑から、石灰石はヴェルテンベルクとライン・ヘッセンとの沼沢地から、石炭はザールおよびルー地方から購入し、製品は関税同盟区域のほかスイス、ベルギー、オランダ、オーストリアにまで売りさばいた。一八六四年の労働者は二八〇乃至三〇〇名で、その大部分は工場内に居住したという。労働者数は一八六九年には三九〇名に上昇している。化学肥料は、この年代には農民を啓蒙して偏見を除く必要があつて、マンハイムの「ツインマー社」(Firma G. K. Zimmer)はネスラー博士の著「肥料学」を一八六六年に発行したりしている段階だが、これは非常にひらく読まれて、しだいに化学肥料が普及しはじめている。ここでの一八六九年の労働者は約一四〇名。カールスルーエ市でも「パウリ」(O. Pauli)の化学工場が人工肥料(主に骨粉とカリ)をつくっていたが、これは労働者も一八六〇年代の

末に五〇乃至六〇名^(註33)

アウクスブルクでは、化学工業にバーデンのような大規模のものはなく、一八六〇年代にはせいぜい四〇人くらいを使っており、二〇人前後のものが多いが、ただマッチ工場で、一八六九年に設立されたのが一〇〇名近い労働者を使っているらしい。製紙および皮革工業でも、あまり規模の大きいものはない。醸造業でも五二名を使う工場が最大で、あとは三〇名、二九名、二七名、二一名、一八名、一六名といったところである。煙草工場では「ロッツベック」(Loetzbeck'sche Tabakfabrik)が一八五〇年に一〇〇名を使っていたが、技術の改良でそのうち労働者数が減少し、六〇年代には五〇名前後になったようだ。一八五七年に設立された帽子製造工場「カスパー・レンバート」(Frlizstumper- und Hut-Fabrik von Kaspar Lembergt)は一八六二年には一〇人しか使用していない小規模のマニファクチュアだったが、このころミュールハウゼンとヴェルテンベルクとに機械を使う工場ができて安値で仕上りのよい製品を売出したので、レンバートも翌一六六三年に機械化し、約三〇名を使用するようになった。そのうち機械化を進めて一八七〇年には約八〇名を使っている^(註34)。

一八六〇年代における工場の発達を労働者数に焦点をしばって、南ドイツのバーデンとアウクスブルク市とについて見てきたのであるが、この時期にかなり大きな規模の工場が相当に数多く存在していることが明らかとなった。一八六三年五月十二日と推定されるラッサールの書簡に見ゆる「南ドイツ新聞」の記事、すなわち南ドイツの工場労働者のあいだにラッサールの追隨者が非常に増加したということも^(註35)、こうした背景のもとに理解される。しかし、この「非常に」が実際にはどの程度のものであるかは、わからない。総じて一八六〇年代のドイツ工場労働者の大部分は、社会主義運動にたいして積極的ではなかった、という事実は動かさないように思われる。そうとすれば、それはいったい何ゆえであったか。この問題を解明するためには、労働市場の状態、工場がわの厚生制度、賃金、工場労働者の構成、そのほか多くの面から

考えてみなければならぬ。

- 註(1) 「史淵」七九輯、本稿(上)四九ページ。なおMaschinenbauer は、本稿(上)では機械を製造するところを明示するために「造機工」と訳したが、イギリス労働運動史上の engineer は通常「機械工」と訳されてくるので、以下「機械工」とする。
- (2) Bernstein, Eduard: Die Geschichte der Berliner Arbeiter-Bewegung. Ein Kapitel zur Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Berlin. Erster Teil, S. 177.
- (3) このこと、一八六九年七月四日号の「フンクマーン・ゼイトゥング」の紙ひかひに „stimmliche Parteifreunde, insbesondere die Zimmerleute, Maurer, Zigarrenarbeiter etc.“ (金管友諸君、とくに大工、左官、巻煙工など) といふことから分るべきである。Bernstein, S. 197. この日田融十・靴工を加うところは、本稿に述べるシヤウマンツマー派の役員の種類からわかる。
- (4) フアリーの職種は不明。
- (5) Bernstein, S. 180f.
- (6) Ibid., S. 182.
- (7) Ibid., S. 184.
- (8) Ibid., S. 188f.
- (9) Ibid., S. 196.
- (10) Ibid., S. 194ff.
- (11) Ibid., SS. 202—204.
- (12) Cf. La Grande Encyclopédie (Larousse), Tome VII, p. 448. Henderson, W. O.: Christian von Roher als Beamter, Finanzmann und Unternehmer im Dienste des preussischen Staates 1810—1848. (Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 3Hft 1956. S. 542. Allgem. Deutsche Biographie, Bd. III (1876), Artikel Borsig.
- (13) Matschoss, Conrad: Die Maschinenfabrik R. Wolf, Magdeburg-Buckau 1862—1912. Die Lebensgeschichte des Begründers, die Entwicklung der Werke und ihr heutiger Stand. Aus Anlass des 50jährigen Bestehens. 1912. S. 17.
- (14) Ibid., S. 19.
- (15) Ibid., S. 3.
- (16) Ibid., S. 26. なおベルリンの初期の造機工場については Cf. Henderson, W. O.: The State and the Industrial Revolution in Prussia 1740—1870. Liverpool 1958. pp. 106f, 112—114. ンダートンと Wohlerl と Wohlerl と同じである。ンダースンによれば、ヘーゲルス工場の創立は二二一年。
- (17) Kistler, Franz: Die wirtschaftlichen und sozialen Verhältnisse in Baden 1849—1870. SS. 100—102, 130—132.

- ⑧ *Ibid.*, SS. 229—231.
- ⑨ *Ibid.*, SS. 65, 100, 101, 131.
- ⑩ Grassmann, Josef: Die Entwicklung der Augsburgger Industrie im Neunzehnten Jahrhundert. Eine gewerbegeschichtliche Studie. Augsburg. SS. 103—117.
- ⑪ *Ibid.*, S. 171.
- ⑫ クララ・ツェトキンは「ドイツのプロレタリア婦人運動史」(一九五八年刊)のなかで、一八六七年クリミッチャウ市に創立された Spinn- und Webgenossenschaft E. Stehfest & Co. (ハー・シュテーフェスト会社紡績織布ゲノッセンシャフト)の Die Internationale Gewerksensenschaft der Manufaktur-, Fabrik- und Handarbeiter mit ihrer Kranken- und Sterbekasse (それぞれ疾病および死亡基金をもつマニユファクチュア・工場労働者ならびに手工労働者のインターナショナル労働組合)の強固なバックボーンだった——と書いている。これで見ると、紡績・織布のシュテーフェスト会社(通常「協同組合」を意味するゲノッセンシャフト)がここではゲヴェルクスゲノッセンシャフトの意味で使われているか否か明らかでない)が活動しているわけだが、ツェトキンがこれ以上くわしくは知らない。
- ⑬ Hausherr, Hans: Wirtschaftsgeschichte der Neuzeit vom Ende des 14. bis zur Höhe des 19. Jahrhunderts. 2. Aufl. 1955. S. 390f.
- ⑭ Kistler, SS. 86—90, 124—126.
- ⑮ *Ibid.*, S. 93.
- ⑯ *Ibid.*, S. 90.
- ⑰ Grassmann, SS. 49—55.
- ⑱ *Ibid.*, S. 54f.
- ⑲ Bechtel, Heinrich: Wirtschaftsgeschichte Deutschlands im 19. und 20. Jahrhundert. München. SS. 236, 243.
- ⑳ Kistler, SS. 102f, 132.
- ㉑ *Ibid.*, 133.
- ㉒ *Ibid.*, 133f.
- ㉓ *Ibid.*, SS. 135—138.
- ㉔ Grassmann, SS. 128—135, 139—151.
- ㉕ 「史淵」七九輯「本稿(上)四〇ページ。

**Deutsche Arbeiterbewegung und die Fabrikarbeiter
in den sechzigen Jahren des 19. Jahrhundert. (II)**

von E. Kobayashi

Es waren die Berliner Maschinenbauer, die unter den Fabrikarbeitern aufs entschiedenste die entgegengesetzte Stellung

zu der sozialistischen Arbeiterbewegung in den sechziger Jahren nahmen. Warum nahmen sie solche Stellung? Waren alle deutsche Maschinenbauer die Anhänger der Fortschrittspartei? Nachdem die fortschrittsparteilichen Delegierten aus dem Allgemeinen Deutschen Arbeiterkongress zu Berlin im Jahre 1868 ausgedrängt worden, öffneten sie in dem Universum ihren eigenen Kongress, dessen Besucher grösstenteils die Maschinenbauer waren. In diesem Kongress aber sprachen fünf Maschinenbauer (nach Ed. Bernstein einer aus Berlin, die übrigen aus anderswo) ausdrücklich vom sozialistischen Standpunkt aus. Über diese bemerkenswürdige Tatsache kann ich leider nicht nähere Nachrichten finden. Auch über die politische Stellung der Arbeiter in den Fabriken ausserhalb des Maschinenbaus müssen wir untersuchen. Aber die Materialien für solche Untersuchung sind sehr wenig in bezug auf die sechziger Jahre. Nur in Baden und der Stadt Augsburg konnte ich einige Kenntnisse bekommen. Wenigstens können wir feststellen, dass die meisten deutschen Fabrikarbeiter damals nicht aktiv an der sozialistischen Arbeiterbewegung teilnahmen. Warum? Um auf diese Frage zu antworten, müssen wir die Lage der Fabrikarbeiter von vielen Gesichtswinkeln aus untersuchen: nämlich die Lage des Arbeitsmarkts, den Lohn, die Kassenverfassung durch die Fabrikleitung, die verschiedenen Bewusstseinsgrade der verschiedenen Schichten der Fabrikarbeiter u. s. w.